

西川一三「秘境西域八年の潜行」を描いた沢木耕太郎「天路の旅人」 (その2)

八柳 修之

青海省タール寺からラサへ

青海省のタール寺からラサへの巡礼路は3ルートあったが、サルタン公路を進むことにした。このルートは標高ほどには険しい山岳地帯ではなく高原の台地を進むことになる。数か月は無人地帯が続き、あちこちに匪賊が出没するため春に出発する大きな隊商に加わるが必要だった。1945年2月、タール寺で親しくなったラマ僧の世話で30代のソナムとドンブルという二人のラマ僧と青海省の奥深くにあるシャンという街へ向けて、乗用の3頭のラバ、荷物を積んだ25頭の駱駝で出発、いずれも西川を密偵と知っていたことである。

途中出会ったチベット人2人が加わり駱駝は40頭となった。西川は8頭の駱駝を曳くことになったが、これまでの経験から駱駝の顔つき瘤の形状が微妙に違うことが分かるようになった。

西寧からルサルにかけて一帯は海拔2000m、青海湖は3,000mである。4日目、眼下に**青海湖**（クラノール）、名前のごとく真っ青だった。青海湖こそ、「西北」という名の中国奥地への憧れをいだいていた日本の若者たちにとって、象徴的な土地であった。丸2日、歩き続けて地の果て**ツアイダム盆地**のシャンに着き、ソナムの縁者のチベット人のドニルチェンポー家の下男として逗留することとなった。例によって西川は下働きとしてよく働き信頼を得ていった。



ツアイダム盆地



青海湖

ツアイダム盆地のシャンからチベットのラサまで、最低でも3か月かかるという。（現在、西寧からラサまで109号線という国道が通っており1907kmであるが、シャンからラサまでの距離は1400km程度、札幌から博多までの距離、ツアイダム盆地からラサまでの高低差は1500m程度であると沢木は述べている）

3か月に及ぶ旅の間、ほとんど無人地帯を行くため食糧の補充が出来ない。そのため馬、ラバ、駱駝、ヤクが利用された。ヤクは力が強く水を恐れないことから河を渡らなければならぬこのルートには必要だった。

2頭のヤクの外、食糧など用意した。問題は旅をともにする連れであった。1945年の7月、ラサへ行くタンゲート人の大商人ラブランアムチトが連れて行ってくれることを約した。

1945年7月（8月には終戦となるのだが）、シャンを出発。アムチト一行が待機しているツアイダム盆地とチベットへ至る**デブスイン峠**で落ちあった。一行はアムチトほか15人のタンゲート人の使用人他13人、前のイシとは違うイシと従者の2人、13頭のヤクを連れて来て彼らと同行することになった。**デブスイン峠**を出発したのは西川が到着してから6日目であった。この間、西川のヤク2頭が逃げ出し絶望的となったが、運よく見つけ出した。アムチト一行は一旦ツアイダム盆地に降り、**ボルハンブタ山脈**の麓に沿って西に向かい、チャガンゴール河が流れているところからボルハンブタ山脈越えを開始した。山越えは無事だったが下りではヤクが勝手に道から外れ、西川のヤクも見失うということがあった。ヤクを失えば旅は終わりということになるのだ。山を下りきると平野が広がっていた。翌朝、河を遡り山峡を通してボルハンブタ山脈を横断、標高4500mの**ラムラ峠**（天の峠の意）に到達、同行の蒙古人たちは次々と急性の高山病にかかってしまった。



デブスイン峠



ポルハンブタ山脈



ラムラ峠



アラガイノール湖



崑崙山脈



シュキンゴール山脈



標高 5200m のタンラ峠を越える天空列車

峠を越えて、やがて東方の山麓にアラガイノール湖が見え湖畔で宿営、家畜に栄養をつけた。さらに匪賊を恐れて加わった 50 人余りのタングー人が加わり一行は、家畜の総数は千数百、隊列の長さは 200m ほどに達した。湿地帯が続きシュキンゴール山脈の山麓で宿営、翌朝、ようやくサルタン公道に戻った。遠くに崑崙山脈の万年雪が見えた。それからは本格的な無人地帯が続き、進むにつれて砂漠化し砂と粘土の台地となり家畜たちにも衰えが目立つようになった。やがてこの旅における最大の難所であるリチュ河、揚子江の源流である。渡河は泳ぎが出来ない遊牧民は水を最も苦手とする。100 頭位のヤクが勝手に渡河。西川が泳げると口ばしたため、冷たい河を泳ぎ、死ぬ思いでヤクを対岸に追い返すことができ、仲間の危機を救った。アムチトから謝礼にと銀貨 25 枚と羊 2 頭を贈られた。隊商の危機を救ったという噂は千里を越えチベットにも及んで、無一文になった西川の身を助けることになった。渡河点を求め上流に向かいやっと渡河したが泳げない羊 40 頭余を失った。それからは最後の難所、標高 5,200m のタンラ峠である。

タンラ峠の南麓はチベット領土である。渡河、峠越え、餓え、匪賊の襲撃。人の住む地帯に入ると、盗み、そしてチベット役人たちの貪欲さであった。ラサに至る道のなかで最大のナクチュの街でラサへの旅行証明書取得のため足止めされるなかで、日本と中国に間に講和が結ばれ、戦争が終わったらしいという噂を耳にした。一行はラサへの第二の関門ともいうべきサンシュンの街、ラーニーの二つの峠、そしてツアイダム盆地のシャンを出てから 108 目にしてラサの街に入った。経典に一本ずつ短い線を引くことで一日を記録していたからであった。その線の数は煩惱の数と同じ 108 本になっていた。

ラサに入った西川は同行のモンゴル人と共にアムチトに紹介で、デプン寺所有の建物の一室を借りた。ラサの街はキチュ平原の中央の位置し、釈迦牟尼仏を祀ったツオグラ仏殿を中心に広がっている。ラマ教の信徒たちはここを目指して各地からやって来る。ラサの街は各地からの巡礼者を相手にすることで成り立ち、家のすべてが商店であり、人のすべてが商人のようだと思えた。ツオグラカン仏殿の西の丘にはダライラマ住むポタラ宮である。



ツオグラ仏殿



ポタラ宮

ようやく辿りついたラサに西川は 1 週間足らずしかいなかった。理由はラサから出たいという思い、第二にラサにはいられないという状況があった。日本がアトムボムボという物凄い爆弾で敗戦になったという話である。ラサから歩いて 20 日ほどでインドへ行くことができる。インドへ行けば日本人に会えるかもしれない。会えなくとも情報がつかめるかもしれない。西川はインドへ行きたいという気持ちになった。自分はチベット語が話せない。同行者が必要だった。ラサからインドへの道は蔵印公路と呼ばれ、ラサからチュシュ、ギャンツエ、パリ、ヤートンを経て国境のヒマラヤ山脈の峠を越えてインド側のカリポンに出る。思い悩んでいたところ、これまで一緒だったバルタンが途中まで行くシガツエのタシルンポ寺まで行く巡礼者を見つけて来て同行することにした。10 月初旬、巡礼者の姿になって 5 人と共にシガツェへ向けて出発した。チベット人なら 8 日で歩くと言われるが西川たちは 12 日間かかった。その理由は荷物の重さだった。シガツェはチベット第 2 の都市、人口約万人で、インドから物資が流れて来て二人は楽に暮らせ、休養になった。(つづく)



シガツェの町



チベット全図